

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02614

研究課題名(和文)クィア理論と日本文学—クィア・リーディングの可能性と実践

研究課題名(英文) Queer Theory and Japanese Literature-How consider adapting queer theory on Japanese Literature

研究代表者

中川 成美 (Nakagawa, Shigemi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70198034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1990年代に新たな分析理論として出発したクィア理論を、日本文学研究の上に照らしだし、新たな批評理論の可能性と実践を、国際的な共同研究のもとに実施したものである。クィアネス(クィア性)を作品批評の一つの軸と設定することによって、文学批評の地平は大きく変化していく。本研究で開催したワークショップや講演会、シンポジウムはその一面を拓いていったものとする。特に1)ジェンダー配置の不等性2)災禍と女性配置3)クィア理論と情動理論の融合、についての、新しい知見を得たことが主たる成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では主に現代日本文学の作品をとりあげ、そこに胚胎するジェンダーの問題に注目、それらをクィア理論によって読み替え、また同時にその問題点を考察していくことに主眼が注がれた。特に3:11以降の言説に見られる不当な女性配置の問題はここで前景化した。また一方にそれらを圍繞する社会的背景を剥出しながら、その身体的・心理的回復を目指そうとする情動の力についても、多くの知見を得ることができた。それは国際的な共同研究による成果とも言える。

研究成果の概要(英文)：This research aims to establish new Japanese literary theory by considering queer theory that started from 1990s in United States. This new analysis theory carries out practice on the basis of international research group. By setting queerness to one axis of work criticism, the ground level of literary criticism changes a lot. I think that the workshop, lecture and symposium which were held by this research cultivated the whole surface. It is a most important issues of this research that we obtained the new knowledge .1)Gender discrepancy 2) Disaster and Women's relocation 3) arrangement between queer theory and affect theory.

研究分野：日本文学・文化研究、クィア理論研究

キーワード：クィア理論 日本文学・文化研究 情動理論 ジェンダー 国際共同研究

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### 研究課題 クィア理論と日本文学 クィア・リーディングの可能性と実践

本研究は1990年代に新たな理論として出発したクィア理論を、日本文学の上に照らしだし、新たな批評理論の可能性と実践を目指したものである。2015年当時、日本においては社会学やジェンダー学、あるいは政治的行動理論としては定着した感のあるクィア理論であるが、主にセクシュアリティの問題やLGBTのアクティヴィズムに括り付けられて論議され、また「クィア」という語の浸透も、その方向で深まったといえる。本課題研究は、特に日本文学研究において、その理論がどのように有効であるかを検証し、同時に新たな理論の枠組みを考察していこうというものである。

クィア理論は、1990年、カリフォルニア大学サンタクルーズ校で開催された「クィア・セオリ」学会で、テレサ・デ・ラウリティスが初めて提唱した概念である。専らゲイやレズビアンなどセクシュアル・マイノリティに向かって投げかけられていた侮蔑語「クィア Queer」を敢えて転換させて用いたデ・ラウリティスの戦略は成功して、現在クィアという言葉は自立した意味を獲得して社会的に流通している。70年代以降のフェミニズム理論、またゲイ/レズビアン・スタディズ、ジェンダー・スタディズから継承された社会的行動力をもった実際的な理論として出発したのである。しかしながら、一方にクィア理論はポスト構造主義以降の思想の展開とも深く関与している。ミシェル・フーコーらによって開かれたセクシュアリティ研究は、カルチュラル・スタディズやジェンダー理論などと接点を持ちながら、独自の発展を遂げ、異性愛に照準が絞られている社会の不均衡な性のあり方へ、根源的な疑惑を投げかけた。ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』(1990)、イヴ・セジウィック『クローゼットの認識論』(1991)が出版され、クィア理論は確実に構築されていった。バトラーによって提示された「パーフォーマティビティ」、セジウィックの「ホモ・ソーシャル」などの概念はいま、一般的な認知を得ている。男/女の二項的な分別が、実は社会の権力諸関係、および言説の優位的な支配によって保持されているというこれらの理論は、セクシュアリティの存立問題を基盤としながらも、実は人間のアイデンティティという根本的な生存要件の問題として知覚されたのである。

ジョナサン・カラーはクィア理論の重要な概念のひとつである「パーフォーマティブ」について、その概念は前には周縁的であった言語を中央にのぼらせ、「われわれが文学を行為、出来事として考えるのを助ける」(『文学理論』、原著1997)と述べ、「文学は軽薄な擬似的陳述ではなく、世界を変容させる言語行為の一つとして位置」(同前)を占めるであろうことを指摘した。明らかな文学読解の変容をもたらすであろうこの理論は、アメリカにおいて主要な文学分析理論として機能した。日本においてクィア理論は、主にゲイ/レズビアン・スタディズにおけるアクティヴィティに大きな影響をもたらし、現在のLGBTなどの社会的認知に繋がった。また外国文学研究の領域、特に英語圏文学研究には新しい文学理論として応用されるようになった。しかしながら、日本文学研究にあっては、その理論が浸透しているという状況にはない。海外からの様々な批評理論が「導入」、「応用」、また「消費」されていく日本の文学研究のなかでこのクィア理論も同様の方向をたどるのであるか。

本研究はこうした現状、およびそれへの挑戦として企図された。このわずか25年の歴史しかもたないクィア理論を、私たち日本文学研究者はどのように考えればいいのかという発想のもとに、2015年1月9-10日、申請者が勤務する立命館大学にて「クィア理論と日本文学 欲望としてのクィア・リーディング」という国際会議を開催した。基調講演にアメリカの日本文学研究者キース・ヴィンセント氏(ボストン大学)、言語研究者クレア・マリー氏(メルボルン大学)を招聘し、アンドリュー・ガーストル氏(SOAS)、呉佩珍氏(台湾政治大学)、スティーブン・ドッド氏(SOAS)、ハナワユキコ氏(NYU)、上野千鶴子氏(立命館大学)、セシル坂井氏(パリ第7大学)らが、この企画に呼応して参加してくれた。総合コーディネーターとして中川は講演依頼等の人選をし、また発表募集を行ってプログラムを組んだが、ここで気づくのは海外における日本文学研究者がこの会議に大きな関心を持ち、世界各地から当日会場に訪れてくれたことである。上野千鶴子氏は日本においてクィア研究は主に社会学やアクティヴィストによって支えられている状況を挙げて、海外においては文学研究の主要なメソッドとして応用されていること自体が、研究対象となると発言している。しかし、本会議で取り上げられた「とりかえばや物語」や春画、読本をひくまでもなく、日本文学には豊穡なクィア・テキストが存在する。日本文学テキストを対象とするクィア・リーディング(クィアな読みの可能性)について、新たな取り組みをする必要があることを確認した。その成果は『立命館大学言語文化研究』28巻2号(2016・12)に「クィア理論と「日本」「近代」「文学」 欲望としてのクィア・リーディング」(pp1-103)として纏められた。

ここで交わされた論議の経験から、本申請は出発し、科研受給後の方向を見出した。文学研究、そして日本文学研究という領域での研究の可能性を新たな視点を持って見直したいという、この参加者たちの意思が、この科学研究の主なる骨子である。

## 2. 研究の目的

日本文学研究はジェンダー理論、カルチュラル・スタディズの視点から、多くの日本文学テキストを読み換えてきた。だが、クィア理論において、最も重要な分析点としてなるのは、これまで可視化されてこなかったものの発見と大きく結びついていることにあるだろう。タムシン・バーゴはその著書『フーコーとクィア理論』(原著1999)のなかでセクシュアリティはクィア理論の重要な分析の鍵となるものであるが、「人種、宗教、国籍、年齢、階級など、不平等な権力関

係の維持にからむ知のカテゴリーとの関連においてどんどん検討されるように」なることを示唆している。つまり、セクシュアリティは人間の中核的な主体認識の要件であることは勿論であるが、その主体の認知をささえている諸制度が、実は権力の構造の中で変数を伴って曖昧に生成する実態に目を向けなければ、分析はできないということである。したがって研究期間内で次の6点に研究の目的を集約した。1)日本におけるクィア理論を文学の上に照らしだし、理論形成を行う。文学研究としての独立性を保ちながら、関係諸領域、また諸地域で発展するクィア理論と相互に研究協力、研究検討を共に実行していく。2)そのために緩やかな日本文学とクィア理論の研究グループを組織するための準備をする。3)具体的なテキストをとりあげて講演会、研究会、ワークショップなどを開催し、特に若手研究者を中心とする精力的な発表を促す。4)文学とクィア理論に関する資料を調査して、データベースにする。5)当該領域の研究をする研究者と共同ワーク・ショップを開催する。6)新たな日本文学研究理論としてのクィアスタディズの確立を目指した。

### 3. 研究の方法

日本文学研究は長い歴史を有するが、中川の専門とする近代文学研究では主に終戦後に発足、長足の早さで進展した。しかしながら一方に批評理論の進展によって、その研究方法は時代の影響を受けながら変転したとも言えよう。特に文字テキストに括り付けられてきたテキストがゆるやかに変容して、非文字テキストである映像やアニメーションなども包括していく流れを迎えた。いわば心理的、身体的な人間の内面を描いていく「文学」という枠組みの中で、解釈項の措定が多様化したとも言えるであろう。私はそうした変化のあり方に中心的な役割をした「情動」概念の新たな動向が関与したと考えている。クィア理論はまさしくそうした「情動理論」のなかに位置付けて考えたとき、専らセクシュアリティに括り付けられてきたその概念が、多方向的な性の配置を指摘するだけでは不十分となり、それを布置する「何ものか」に向けて分析するという方向が発見されたのではないかと考えている。付け加えれば、文学という文字テキストに内在する知覚的感知のあり方そのものへ向けて思考する必要があるが日本文学研究に生じたとも自分なりに解釈した。クィア理論がそうした身体と内面、フィジカルとメンタルの軋轢から生じた概念であったとすれば、文字テキストに内包される知覚的な感知と、それをとりまく「制度」の違和は、まさしく文学的な課題となって浮上するであろう。逆説的に言えば、そのことが文学を成立させる案件として提示されているのだとも言える。文学はここで再考される。

クィア理論を文学の上に照らしだし、理論形成を行うために、その接続点となるジェンダー論、カルチュラル・スタディズ、言語論、翻訳論、情動論など隣接領域の成果をどのように文学理論とかかわらせるかという問題がある。先ず、そうした理論構築の基礎として文学研究としての独立性を保ちながらも、それらへの積極的なアプローチが必要であると考え。日本と海外を繋いでいくネットワークを研究期間内に作り、同時に双方向的なやりとりを促進させた。

### 4. 研究成果

初年度にあたる2016(平成28)年度は3回の研究会、および海外学会発表、および打ち合わせを行った。第1回は2016年6月23日、キースヴィンセント氏(ボストン大学)を招き、「子規と漱石 クィアな友情、俳句のホントロジー」(ディスカッサント:木村朗子氏・津田塾大学、依田富子氏・ハーバード大学)を開催した。第2回は2016年7月15日、ジェラルド・ブルー氏(セルジ・ポントワーズ大学)を招き、「江戸川乱歩の『孤島の鬼』に於ける読書論とジェンダー論」(ディスカッサント:サラ・フレデリック氏・ボストン大学)を開催した。第3回は2017年1月20日、ジャクリーヌ・ベルント氏(ストックホルム大学)による「情動の力:マンガとクィアリング」(ディスカッサント:中川成美)を開催した。会場はいづれも立命館大学衣笠キャンパスにて実施した。また2016年8月30日から9月21日まで、中川のフランス滞在中(ストラスブール大学客員教授として招聘)に、ジェラルド・ブルー氏や、アントナン・ベシュレール氏(ストラスブール大学)らと研究協力に関する打ち合わせを行った。具体的には次年度の研究会開催についてである。2017年3月10日・11日には、モンリオール大学で開催された「三位一体からフクシマへ、そしてそれを超えて(From Trinity to Fukushima and beyond)」にて、「日本女性作家における3:11の記憶(Images of 3:11 in Women Writers in Japanese Literature)」を発表、ここでもリヴィア・モネ氏(モンリオール大学)らと研究協力の打ち合わせをした。また続いてトロントで開催されたアメリカアジア学会(AAS)にて、「コミュニティとセクシュアリティー日本プロレタリア文学におけるクィアな欲望(Communism and Sexuality: Queer desire in Japanese Proletarian Literature)」を発表した。ここで日本プロレタリア文学の上に、どのようにクィア理論が応用できるかを考えた。そのことは次年度のリーズ大学での『転向』シンポジウムの開催に結び付いた。

2017(平成29)年度の研究としては、クィア理論を文学の上に、どのように反映していくかについて、いくつかの試みをした。先ず、1920-30年代日本文学、特にプロレタリア文学における身体性の問題について、情動という側面から考えてみた。2017年6月30日から7月2日までイギリス・リーズ大学にて、マーク・ウィリアムズ氏(リーズ大学)、イレーヌ・ハイター氏(リーズ大学)の組織のもとで開催された国際シンポジウム「転向:歴史、文化、政治性(Tenko in Trans-War Japan: Politics, Culture, History)」(日本学術振興会の後援)にて、「感情的倫理性としての転向」を発表した。これは「文学と情動-発見としてのプロレタリア文学-」(『立命館文学』2017年8月)として発表した。ここでクィア理論の基本的素地としてアフェクト理論の重要性を指摘したが、未だ日本文学では定着していない情動理論を接続させながら、身体と意

識、感情との接合を考察した。同年9月1日にはリスボンにて開催されたヨーロッパ日本学会(EAJS)にて、「視覚芸術としての文学: 3:11以降の想像力と視覚性」を発表、現代作家における情動的把握における異質な感覚、クィア感覚について分析した。その後、パリに滞在してクィア理論とアフェクト理論の接合点としての視覚芸術と文学の関係についての調査を、パリ国立図書館、パリ・ディドロ大学図書館などで行った。特にベルグソン以降の感情と意識の派生についての研究を渉獵した。2018(平成30)年3月24日、ワシントン・D・Cにて開催されたアメリカアジア学会(AAS)でジョージ・シーポス氏が組織したパネル「強要された信念と意志の転向 戦前戦後の転向文学をめぐって (Coerced Beliefs and Willing Conversions: Tenko Literature in Pre- and Postwar Japan)」に参加、ディスカッサントとして、「転向」という現象に付随する身体的、情動的知覚へのクィア理論の必要性を併し、情動論の深化を図った。なお、2017(平成29)年7月には、情動の問題にも触れた『戦争をよむ 70冊の小説案内』(岩波新書)を刊行した。

2018(平成30)年度は中川の個人的事情にて研究の続行が困難となり、活動を休止せざるを得なくなった。計画の進行が大幅に狂い、研究計画を変更して、1年間の延長を申請し、認可された。わずかに2018年7月21日立命館大学国際言語文化研究所で開催された「シンポジウム『戦争と性暴力の比較史へ向けて』を読む」に参加、「戦時性暴力と文学の関係」を発表した。これも戦時下の性暴力を対象に、そこに介在する情動とクィアな欲望の問題を論じた。なお、これは『立命館大学言語文化研究』第30巻3号(2019・2)に「戦時性暴力と文学の関係」(pp19-23)として発表した。併せて2018年11月30日に関口涼子氏(詩人、翻訳家)を招き「震災後文学とジェンダー」というワークショップを開催、木村朗子氏(津田塾大学)との対談は『立命館大学言語文化研究』第31巻2号(2019・2)に「震災後文学とジェンダー」として発表されている。

最終年度に当たる2019(平成31・令和1)年度は、7月10日に、姫野カオルコ氏を招聘して『彼女は頭が悪いから』を読む」という書評会を、主に大学院生によって組織されたクィア・リーディング研究会の主催にて開催した。これは社会的に問題となった東大生によるレイプ事件を題材に、社会的に反響の大きかった作品であるが、そこに介在する問題をクィア理論を用いて、解明しようとしたものである。10月25日から27日まで台湾政治大学で開催された「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」に出席、呉佩珍氏(台湾政治大学)と国際シンポジウムの開催・実施について打ち合わせを行った。また11月9日には熊本で開催された石牟礼道子シンポジウム「今、石牟礼道子を読むー世界文学のなかの石牟礼道子」に参加、多和田葉子氏、リヴィア・モネ氏、伊藤比呂美氏らと意見交換をした。12月2日にはパリ・イナルコの国際会議「日本文学におけるポスト3:11の展望 (Post 3:11 Perspectives on Japanese Literature)」に参加・発表するとともに、本研究の総仕上げともいえるべき国際ワークショップの打ち合わせを行った。

この国際シンポジウムは、1)ジェンダー配置の不等性2)災禍と女性配置3)クィア理論と情動理論の融合、という3つの柱を設定して、2020(令和2)年3月に国際シンポジウム「クィア理論と日本文学研究 情動理論を手掛かりに」として開催する予定であったが、2019年1月来、世界を唐突に覆ったコロナ禍のために中止を余儀なくされた。今後、再び開催できる日を願うばかりである。このほかにクィア理論・情動理論に関する基礎研究文献目録を作成した。

なお、クィア・リーディング研究会の成果として、2020年8月に刊行の『立命館文学』669号にて、「クィア理論と日本文学 世界文学との接点を求めて」(仮題)で、大学院生を中心とするクィア研究の特集を発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中川成美	4. 巻 31
2. 論文標題 震災後文学とジェンダー(対談) 関口涼子・木村朗子	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 125-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00012773	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 中川成美	4. 巻 30(3)
2. 論文標題 「戦時性暴力と文学の関係」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『立命館言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 中川成美	4. 巻 特別号
2. 論文標題 文学と情動 発見としてのプロレタリア文学ー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中川成美	4. 巻 28-2
2. 論文標題 クイア理論と日本文学ー欲望としてのクイアリーディング	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 立命館『言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 「贖罪は死者への悼みかーいとうせいこう『想像ラジオ』を起点に」
3. 学会等名 コンファレンスLire la Litterature japonaise a la lumiere de l' apres 11 mars、パリ・フランス国立東洋言語文化学院（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 感情的倫理性としての転向 Tenko as emotional ethics
3. 学会等名 イギリス・リーズ大学「転向：歴史、文化、政治性」（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 Literature as Visual Art: Imagination and Visuality Since 3/11
3. 学会等名 ヨーロッパ日本学会（EAJS）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 旅する文学ー国を越えるということ（旅行的文学 所謂穿越国境）
3. 学会等名 台日韓当代作家研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 ディスカッサント「Coerced Beliefs and Willing Conversions: Tenko Literature in Pre- and Postwar Japan
3. 学会等名 アメリカアジア学会 (AAS) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 歴史叙述としてのディストピア『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』をめぐって
3. 学会等名 村上春樹国際シンポジウム(ストラスブール大学) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 Why Japanese are so “sweet” to native Taiwanese: Justice and Sympathy
3. 学会等名 AAS in Asia (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 Natsume Soseki - Japanese great novelist and a film of his novel Kokoro
3. 学会等名 日仏大学会館 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 Images of 3/11 in Women Writers in Japanese Literature
3. 学会等名 conference of From Trinity to Fukushima and Beyond,
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中川成美
2. 発表標題 Communism and Sexuality :Queer desire in Japanese Proletarian Literature
3. 学会等名 AAS (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 安倍オースタッド 玲子、アラン・タンズマン、キース・ヴィンセント	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 298
3. 書名 漱石の居場所	

1. 著者名 中川 成美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店(岩波新書)	5. 総ページ数 197
3. 書名 戦争をよむ : 70冊の小説案内	



1. 著者名 浅野豊美、小倉紀蔵、西成彦、東郷和彦、外村大、中山大将、四方田犬彦、熊木勉、中川成美、加納実紀代、藤井貞和、熊谷奈緒子、上野千鶴子、天江喜久、金哲	4. 発行年 2017年
2. 出版社 クレイン	5. 総ページ数 336
3. 書名 対話のために	

1. 著者名 中川成美・村田裕和編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 369
3. 書名 革命芸術プロレタリア文化運動	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----